

アトリエ 琉游舎 だより 182号

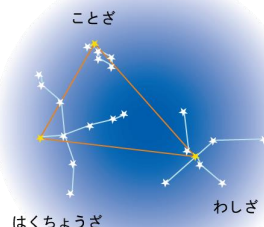
アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年7月3日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



夏の大きな三角形



- 梅雨の期間に夜空を見上げて何も見えないことが多いでしょう。雨でなくても大気は湿気を含み、外灯の明るさや樹木の葉っぱにも遮られて、見える星空の明度と範囲は限られてしまいます。このような季節に七夕の織姫と彦星を見ることはなかなか難しいことです。
- しかし冬のオリオン座に匹敵するような星の並びが夏の夜空にもあります。夏の夜空に見える三つの1等星を線でつなぐとできる大きな三角形。こと座のベガ、わし座のアルタイルと、はくちょう座のデネブで構成された「夏の大きな三角形」です。ベガは七夕の織姫、アルタイルは彦星です。この二つの星の間を天の川が流れます。夏の大きな三角形は星座ではなく、夏を代表する星の並びですが、みつけやすいので、夏の星座を探す時の目印に使われます。
- 海と空と山の向こうは人が簡単に行き着くことが出来ない所、だからその先に何かあるのかと好奇心と冒険心を刺激する場所です。しかしその好奇心も頂上にたどり着いてみるとその向こうにもまだ広がる山々を見て、その先をまた目指そうとする欲望の持ち主が人間なのでしょう。好奇心が独占欲や征服欲に変わってそこに境界線を引いていくのも人間の本能の現れなのかも知れません。内と外を分かť境界は人間の果てのない欲望の産物なのでしょう。
- 果てのないはずの山や海のその先にも、今では境界が引かれ地球上の山も海も領土や領海という名の誰かの所有物となってしまいました。夜空を眺めていると広大な宇宙はまだ誰の所有物にもなっていないはずですが、それでも手の届くところから順に所有権の楔が打ち込まれているように見えます。もしその先を見てみたいという人間の好奇心があらゆる欲望の根源となっているならば、梅雨の真っ黒な空を見上げながら「何も見えなければ欲望もなくなるのでは」とあらぬ思いにふけても、間違いなく夏の大きな三角形は暗闇の空の向こう側で燦然と輝いているのでしょう。

7月・8月スケジュール

7月			8月			
月	火	水	木	金	土	日
8	9	10	11	12	13	14
	読書会 13時半から		映画会 お休み			写経会 13時半から
15	16	17	18	19	20	21
			映画会 お休み			
22	23	24	25	26	27	28
	読書会 13時半から		映画会 お休み			
29	30	31	8月1日	2	3	4
			映画会 13時半から			写経会 13時半から

読書会

7/9・7/23
(火) 13時半

写経会

7/14・8/4
13時半

映画会

7/11・8/1
(木) 13時半

法律は果たして公正に適用されているのか、無力でないかとの事例を最近よく見せつけられています。例えば政治資金パーティの裏金作りでは事務方が起訴されただけで、主催者の政治家は一切法律的な責任を取らされていません。現場が罪を被りトップは知らぬ存ぜぬが法律的に認められると言う法律の正義を見せつけられて私たちは何を思うのでしょうか。それは不公平だと声高に抗議をする人もいるでしょう。大半はいつものことと諦めるのでしょうか、或いは法律の不備をくぐり抜ければ罪に問われず好き勝手出来るならば自分もやってみようとするかも知れません。法律的には罪がない、条文に沿えば法律違反は何ら犯していないとの結論がもたらす無関心と無気力、モラルの崩壊と不正の助長などの風潮は社会崩壊の兆しともいえるのではないのでしょうか。権力を行使する者がモラルより法律の条文を盾にとって思うがままに振る舞うならば力なき庶民もそれを真似る人が出てくるでしょう。ここのところ選挙運動の妨害行為や選挙ポスター掲示板の使い方にあたっては公職選挙法違反に問われて逮捕されるケースも出ています。その行為を行った者は「法律で禁止されていない」や「表現の自由」と言うことを主張しています。しかしほとんどの人はそれらの行為を見て眉をひそめるでしょう。法律に違反していなくてもモラルに反していると判断しているからです。モラルは言語化して理解するものではありません。行為そのものによって判断されるものがモラルです。

仏教は宗教でないと言われることがあります。世界宗教のキリスト教やイスラム教は創造主である神が世界の体系を構築しています。世界は創造主たる神が作ったものだから、神の思し召すままにそれを受け入れなければならない、それは絶対真である。これが絶対神を創造主と信じる宗教の強固な構造です。創造主の存在を信じない限り成立しないから宗教なのです。しかしお釈迦様は何も創造していません。すでに存在している世界を「縁起の法」によって明らかにしただけです。創造主でも絶対神でもなく、世界の構造を論理的に説明しただけです。世界のあり方を解明した科学者と呼ぶ方がふさわしいかもしれません。私たちは創造主と絶対神の存在を信じているのではなく、お釈迦様が論理的に解明した「縁起の法で世界をありのままに観てありのままに歩むことが安らぎの処にたどり着く唯一の道である」との「行」を信じているのです。

絶対神の意志（神の思し召し）を一人一人に誤解なく正しく伝えることは言葉によってでしか出来ないことでしょう。その伝達の役目が司祭であり予言者であり聖典です。新約聖書「ヨハネによる福音書」の冒頭は有名な「はじめにロゴスありき」で始まります。「創世は神の言葉（ロゴス）からはじまった」と訳されることが多いようです。ロゴスというギリシャ語は単純に言葉という意味だけでなく「言葉を通して表された理性。言語・思想・理論など」と説明されます。私は宗教学者でも聖書に精通しているわけでもありませんが、彼らの行動も思考も「ロゴス＝言葉」を通してでしか伝えることが出来ないという確固たる信念に基づいていることは間違いないと思われまます。一方お釈迦様の教えは「言」ではなく「行」によってでしか私たちに伝えることが出来ないのです。経文があるではないと言われるかも知れませんが。しかし経文は意志の伝達ではなく世界の歩き方（行）のガイドです。数多の経文の中で私が読むものは代表的な数点でしかありませんが、いずれも「安らぎの処（涅槃）」にたどり着くための世界のあり方（空）と歩み方（行）とが書かれているだけです。お釈迦様は意志（言）によって私たちの生（行動）を規定するのではなく、それぞれの選んだ歩み方によって各々にふさわしい安らぎの処を目指しなさい（行）と教えてくれているだけなのです。数多の経文とそこに付随する各宗派が仏教において存在するのは、言葉によって生（行動）を規定するのではなく、各々にふさわしい歩み方（行）への導きを指し示してくれている何よりの証拠です。各々にふさわしい歩み方を各々が選んで各々の道をお釈迦様とともに歩むこと（同行）、これが仏教なのです。

法律は社会形成過程で絶対神の意志（ロゴス）を神の言葉から人間の言葉に書き直す必要から生まれたものではないのでしょうか。言葉には解釈が付きまといまます。その解釈の曖昧さを克服するために、神の言葉を細分化してその時々人間社会に適合する言葉に書き換えたものが法律と考えれば、絶対神を信じる社会には成文法が必要だったことが理解できます。神の言葉から一気通貫に誰もが共通の行動まで繋がれば良いでしょうが、私たちの前には360度全方位に道が開かれています。行動には選択が伴うのです。神の意志（言葉）を正しく行動に繋げるためには選択への価値判断、つまり善・悪・正義・不正などの評価が必要になるでしょう。その評価の多様性を避けるために言葉による厳格な規定である法律が必要だったのです。しかし法律も言葉で書かれるものですから100%すべての人が同じ行動を取るとは限りません。法律の編み目からこぼれ落ちる行動も出てきます。それでも法律は絶対神の言葉を人間の言葉に細分化したものであるという意識が根底にある限りは、創造主を信じる人々にとって法律は絶対真でなければならないでしょう。

言葉で世界を見て行く限り解釈や価値判断が常に伴うでしょう。言葉で規定しきれない世界の穴をどのように塞ぐかが大きな課題としていつまでも私たちに残されるのです。それは価値判断の対立が永遠に続くということです。言葉（ロゴス）の限界です。一方お釈迦様が教えてくれた世界のあり方は「空」です。絶対的な存在も価値も善悪も何もない「縁起の法」によってこの世界があるのです。そこに生きる私たちは言葉でなく「行」によって生き「行」によって他者との関係を築いていきます。他者も社会も「行」を観るのです。「行」が他者に伝えるものは言葉でなく行為です。その行為に共感し共棲し続ける行為を私はモラルと呼びます。価値判断を必要とする言葉（法律）による制御でなく、行為への共感が新たな行為をもたらす「モラル」は、自らの歩みの中で自然と醸し出される行為だからこそ「行」の根底にあるものだと考えます。